

青森県の日本海沿岸の平均的海況（要約*）

天 野 勝 三

（青森県水産試験場）

本県日本海側で昭和39～59年度に実施した海洋観測の資料のうち、水温と塩分量の永年平均値を一括処理し求めた。今回は、その平均値を用いて平均的海況を検討し、次の知見を得た。

本県日本海側には由来の異なった4つの水塊が存在することがわかった。

(1) 沿岸部表層低塩水

3～8月にかけて本州日本海側の大河川の融雪水及び梅雨期の降雨水により低塩化され5月に低塩のピークとなる水塊と、中国大陸起源の淡水により低塩化され10～11月に本県沖に到達する水塊の2系統がある。後者の水塊は対馬海峡においては7月から存在し始めるもので、約3ヶ月の移動期間が想定される。

(2) リマン寒流系低塩水

沿岸部に分布の中心をもち対馬暖流の上に層重する(1)とは地理的に分離し、沖合側の0～10m深に分布の中心をもつ。存在期間は6～9月で低塩のピークは8月にある。存在期間中は常に北側の方が低塩で北方よりの到来を示唆している。

(3) 対馬暖流水

本県沖においては34.1%以上の水塊がこれに相当し、分布の中心は常に岸側にある。34.4%以上を示すのは8～10月の期間であり、対馬海峡付近における高塩分の出現時期（4月）よりみて4～5ヶ月の移動期間が想定される。これは(1)で示した海水の移動期間より1～2ヶ月長い、これは暖流の輸送水量が春期に小さく、夏～秋期に大きいことに関係があろう。

(4) 日本海固有冷水

水温で1℃以下、塩分では34.0～34.1‰で特徴づけられる。本水塊は本県沖では周年を通じて沖側で250m以深、岸側で400m弱以深に存在し安定している。

* 詳細については青森県水産試験場（1986）青森県沖合の海況変動に関する研究その2を参照されたい。